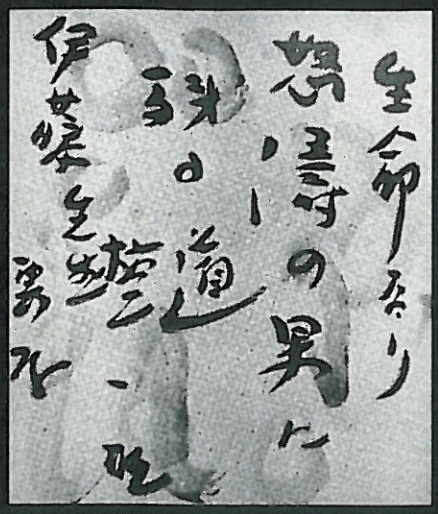
作家

檀　一雄



檀一雄が黒川村長のために書いた色紙

檀一雄は明治４５（１９１２）年～昭和５１（１９７６）年、山梨県生まれ。東京帝国大学卒業。日本浪漫派の作家として数多くの名作を残し、代表作に『リツ子・その愛』『リツ子・その死』『新説石川五右衛門』『夕日と拳銃』『地上』『青い雲』『火宅の人』などがあります。昭和２６年に第２４回直木賞受賞。

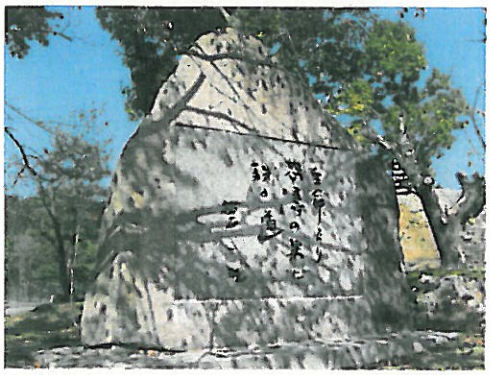
胎内市とのつながりは、昭和４１年に旧黒川村体育館の竣工記念として開催された文化講演会に講師としておいでになり、その際、胎内川渓谷の散策や、水芭蕉を鑑賞され、以後交流がもたれるようになります。

また、檀一雄の娘である女優の檀ふみさんも、父の愛した胎内に何度か訪れ、現在も交流をしています。

檀一雄は、胎内の自然と人々をこよなく愛し、特に胎内川の渓谷の美しさには嘆賞の声を惜しまなかったといいます。また生前御子息に「僕が死んでもし碑が建てられるとなればまず新潟だろうなあ」とよく話されそうです。

昭和５５年に、檀一雄が愛した、この美しい自然にめぐまれた胎内に碑を建立することとなり、樽ヶ橋地内に碑を建立しました。碑文は檀一雄が当時黒川村長のために書いた色紙の中の一文から採られています。

この文学碑はロイヤル胎内パークホテル前に移設され、現在もみる事ができます。



檀一雄文学碑（ロイヤル胎内パークホテル前）